ミツバチといっしょに花が咲き乱れるまちをつくりたい
～Bee Flower city の提案～

１．はじめに（提案の背景）

私は 18 歳の時に人の体のサポートをしたいと思い、東京の按摩マッサージ指圧の学校へ進学、その途中で病気となり、その道をあきらめ、寝たきりの生活を送る中で、投薬治療をする中で、ストイックに食事は良いものを食べようと意識が変わりました。

病気を克服し、食べることの大切さ、自然環境の重要さを意識し始め、故郷の平戸へ北海道出身の旦那を引き連れ、5 年前に故郷に帰ってきました。

病気であった私は、体にやさしく、自然に向き合う仕事がしたいと思っていたところ、寝たきりの時に祖母が送ってくれたハチミツの味を思い出しました。

それまではハチミツは砂糖水を食べているようで嫌いだった私ですが、祖母が送ってくれたニホンミツバチのハチミツの味は、花のような華やかさがあり、口の中に自然の甘味を感じました。

平戸に帰ってきた当初も寝たきり生活でしたが、平戸の自然、実家の料理などにより、だんだんと体が動くようになり、子供が生まれた 26 歳の時に自分の中で母親としての意識が芽生え、自分自身の力で働きたいと思い、平戸の自然を生かした仕事はないか考えるようになりました。

そして、食の大事さに気づき、佐世保にある無農薬づくり野菜で全国的に有名な「菌ちゃんファーム」で土づくりから収穫までの野菜作りを実践して、栄養源としての土づくりの重要さ、虫に負けない野菜作りについて学び、生き物にやさしい無農薬野菜のおいしさや自然と共存することのすごさを学びました。

ECO 石鹸、ハンドメイドアクセサリーを地元のマルシェで売ってところ、好評を得たため、こだわったものをつくれば、買ってくれる人がいる、自分自身で作って売ることの楽しさを見つけることができました。

自然が好きな人が集まる平戸のマルシェは刺激的で、そこに集まる人との出会いが新しい人生の広がりを持たせてくれました。自然と向き合う中で、昔、私に元気をくれた祖母のハチミツのことを思い出し、自然と寄り添う養蜂家という仕事に興味をもったのもその頃です。しかしながら、周りからはハチミツなんて買った方が早いでしょ、巣箱は重いし重労働なので今の体に負担が大きすぎるなどなど猛反対されましたが。。。

自分の中で養蜂家という目標が見えた瞬間、インスタグラムや知人の紹介を得て、福岡市の博多ハニー、佐世保市の佐世保教会（ミツバチを飼っていた)、西海市のミカン畑養蜂所、平戸市中津良の農家、佐世保市の養蜂協会、田平町のブルーベリーファームなどの養蜂家を訪ね歩き、養蜂を始めるための勉強をし始めました。

ミツバチのリアルな飼育環境を見たときに、今まで知っていた昆虫としてのミツバチとは全く異なり、携わる人みんなが「ペットのような愛情」をミツバチに注いでいる実

態を知り、昆虫が大っ嫌いな私がミツバチの「かわいさ」に魅了され、現在、養蜂家として活動しています。

２．ミツバチってどんな虫？

（１） ミツバチってどんな虫

① ミツバチは群れで生活していて、その群れを「蜂群」（ほうぐん）と言います。
１匹の女王バチを中心に働きバチと雄バチで一緒に暮らしています。

（２） ミツバチの歴史

① ミツバチの誕生

恐竜がいた時代は花がなく、緑のみの世界でした。花の誕生と同時にミツバチが誕生したといわれています。花とミツバチは共存関係にあり、花の誕生は世の中を明るくし、その下支えをミツバチがしていました。

② 人がハチミツを使って生活したのは

19 世紀中ごろスペインのアラニアで発見された古い洞窟画に高い崖で自然巣を採集しようと女性が手を伸ばしていた姿がスケッチされています。蜂に刺されるリスクを冒しても手に入れたい魅惑的な食べ物がハチミツだったのです。
人類最古のお酒「蜂蜜酒ミード」はワインより歴史が古く、偶然ハチの巣に雨水がたまり、自然発酵することでできたといわれています。
エジプトにある 3300 年前の古代墓からは壺に入った食べられるハチミツが発見されました。エジプトでは死体をミイラにする過程でハチミツやプロポリスが使われていたと記録があります。

③ 人とミツバチの共存の始まり

ミツバチを家畜のように飼育できる近代養蜂を可能とした人物はラングストロス（アメリカ人）で、取り外しのできる巣箱を開発しました。
1973 年ドイツのカールフォンフリシュ博士が、ハチミツの場所をミツバチが教えあうミツバチのダンスでノーベル賞受賞しています。
オーストリアのフルシュカ大佐が遠心分離機による採蜜を始め、これにより、巣を崩さずにミツバチの負担が軽減しながら採蜜できるようになり、収穫量が格段と向上しました。

（３） なぜミツバチ・ハチミツがすごいのか、環境に良いのか

① ミツバチ抜きでは受粉は成立しない

世界の農作物の７５％以上はミツバチの働きにより、受粉されているといわれ

ています。ミツバチがいなくなると地球全体の生態系が崩れるという学者もいるくらいです。World Bee day(5/22)という日があり、その日は養蜂家がお祝いする日となっています。日本では８月３日にハチミツの日があり、ハチミツを食べたり販売したり、ミツバチの可愛さをアピールするイベントが各地で開催されています。

② ハチミツが語る地域生態系

ハチミツの成分を分析すると２ｋｍ圏内の植生がわかります。ハチミツを通じて地域の生態系を知ることができます。昔のハチミツがあれば、今と昔を比べることもできます。

③ ハチミツは腐らない

ハチミツは自然界で最も甘い食べ物です。糖度が８０度以上であれば腐らないといわれています。年数の立ったハチミツは熟成ハチミツといわれて超高級品です。

④ ハチミツは薬としても利用されていた

古来中国では目薬として利用されていました。「十二臓腑の病に宜しからずというものなし」眼病、皮膚病、呼吸器、消化器、各種ビタミンミネラル、酵素、抗酸化物質の宝庫です。真菌や細菌に対する殺菌力も強いことで知られています。

３．養蜂家のお仕事（作業内容）

私が養蜂家として蜂の飼育をしているノウハウを教えましょう。

（１） 巣箱の設置場所の選定の大切さ

・周辺に蜜源植物が豊富であること

・人通りが少ないこと

・近所トラブル、近隣の方の理解が必要（巣箱から 100m～200m の間にフンの問題が起こりやすい）

・大水の心配がない場所

・南向きに地形が広がっているような場所が良いといわれている。

・木陰、夏の暑さをしのげる場所

（２） 飼育の仕方

① 飼育をする上での注意点

・ミツバチとの向き合い方は大事です。作業中に雑に扱うと、性格が荒くなり、攻撃的になります。怒って刺してくることも。最初はなれなくてもゆっくり作業、丁寧にすることが大事です。

・巣門の前に立たない。（飛び立つときの邪魔になるから）必ず巣箱の横に立って作業すること。

・音に敏感なので音をたてないように気を付ける。

・天候が悪い時は作業しない。（雨・風がある日）

→ミツバチが巣の中にたくさんいて、いつも外仕事している子たちがたくさん巣箱の中にいるので、怒りやすく、攻撃されやすい。

・朝 10 時～15 時が適切といわれています。それは働きバチが外に出ているため

です。

② 主な仕事（セイヨウミツバチの場合）

・内検（巣箱の内部を見る）を週一度実施する。

・見るポイント　幼虫の様子、サナギの数、花粉の色、貯蜜量

・重要なポイント　女王バチの産卵の確認。

・働きミツバチの体液を吸うダニなどがついていないか羽の部分をチェック。

③ 主な仕事（ニホンミツバチの場合）

・ニホンミツバチの場合はセイヨウに比べ、ほったらかしで良いが、週一回程度巣箱の中の掃除をするとスムシ被害が軽減されます。

スムシとは？：ニホンミツバチの巣の中に卵を産んで、蜜ろう、花粉を食い散らかし、巣の環境を悪化させる蛾の幼虫です。

・蜂の巣を下に拡大させるため、巣箱の継ぎ足し（継箱・・・お重をふやすような）

・ニホンミツバチはきれい好きで新しい箱にのみ巣をつくるため、必ず新しい継箱を用意することが大事です。

（３） ニホンミツバチとセイヨウミツバチの違い

ニホンミツバチは種名ではなく、トウヨウミツバチというのが正式名称。

① セイヨウミツバチ

・見た目はオレンジ色が強く、ニホンミツバチより一回り大きい。

・ヨーロッパから輸入された外来種です。なので環境に適応できていない。日本の気候に順応していないため、病気になったり、養蜂家により管理されない

と生きていけません。
・巣の中の環境は養蜂家にゆだねられ、世話が大変な引きこもりです。でもハチミツを集める能力はとても高く、採蜜量はニホンミツバチの 10 倍と多いことで知られています。
・セイヨウミツバチは引きこもりのため、熊に巣を襲われても巣の中から出ることはありません。
・養蜂家が巣を管理することで環境が維持されることから、養蜂家にすべてゆだねられます。
・特定の花（そば、リンゴ、ミカン、アカシア、蓮華、ブルーベーリー、イチゴ）から蜜を集めるといわれ、単一植生の蜜をつくったり、受粉をさせたりするのに適しています。（農作業の受粉などの効率化に寄与させることが可能です）
・プロポリス、ローヤルゼリーはすべてセイヨウミツバチから採取される。

② トウヨウミツバチ（ニホンミツバチ）

・日本在来種です。見た目は黒っぽく小さく、野生に多く生息しています。
・温度変化に弱く、すぐに引っ越してしまいます。ニホンミツバチの巣は温度変化に弱いため、環境の変化に適応しにくいといわれています。
・ヨーロッパにはスズメバチがいないため、日本だとスズメバチにより全滅させられることもあります。スズメバチ３匹で全滅させるほどの勢いがあります。ただし、ミツバチもわが身を犠牲にしてスズメバチを必死に攻撃して追い払う。「熱殺蜂球　ねっさつほうきゅう」によりスズメバチを反撃し、わが身を呈して集団で動きながら、温度上昇させ、スズメバチを殺します。（熱殺蜂球とは、スズメバチは４５℃で死ぬといわれ、ニホンミツバチは４９℃まで生きていたられるため、体温を集団で上昇させ、スズメバチを殺す集団的自衛手段です）
・ニホンミツバチが集めるハチミツは花が特定されないため、複数の花から採蜜されます。（濃く深い味わいのハチミツが採蜜され、「百花蜜」といわれ、熟成された味が特徴です）
・複数の花から取り、自由に動き回るため、採蜜量が少なく、ハチミツの値段も高く、幻の蜜といわれています。

（４） 養蜂家の一年のお仕事

	1月	2月	3月	4月	5月	6月
花		菜の花	梅	桜 ツツジ	ミカン	シロツメクサ
ミツバチ	休眠	巣づくり	流蜜	流蜜	分蜂	流蜜
養蜂家	巣箱づくり	蜜源整備	設置	受け入れ	女王蜂採取	採蜜

	7月	8月	9月	10月	11月	12月
花	ひまわり 栗の花	ひまわり シナノキ	ビワ	ビワ セイタカアワダチソウ	山茶花 椿	
ミツバチ	流蜜	流蜜	流蜜	流蜜	休眠	休眠
養蜂家	販売準備	給餌	管理	採蜜	販売	巣箱づくり 給餌

４．ミツバチがもたらす豊かな環境

（１） 地域の養蜂家として考えること

最初に話した通り、私は若くして寝たきりの生活を余儀なくされました。
現在も治療中です。でもミツバチとの出会いは、ここまで私を動かすくらいの影響をもたらす存在です。
たまに森へ行ったりすると蛇や苦手とする生き物に遭遇するとゾッとすることがあり、自分でもびっくりするぐらい虫が苦手だったので、今の原動力そして、ミツバチを通して平戸の自然の豊かさに気づかされるし、自然と向き合う時間が増え、もっと自分にできることがないか考えます。

（２） 平戸×自然×ミツバチさん

壱岐・対馬では同じ長崎でも、**地域をあげて養蜂**が行われています。平戸でもミツバチがあふれる環境にしたいという気持ちになりました。

田平は昆虫にやさしい町であるからこそアピールもできます。（平戸市田平町は昆虫写真家の栗林慧（くりばやし　さとし）先生の故郷です）

養蜂をする人が増えれば、ミツバチの住む環境、**生き物が生息する環境が守られ、自然を意識する人が増える**のではないでしょうか。

そのような環境は子供たちにも残したいし、**ミツバチは１００年先にもなくてはならない存在**であるため、養蜂のお仕事を通じて、自然環境を残していきたいと思います。

日本のハチミツの消費量の９０％は輸入され、国産は１０％しかありません。**養蜂家は常にミツバチと花を通じて、自然に向き合って暮らす職業**です。その養蜂家が少ないということは、自然に目を向けている人が少ないのではないかと考えてしまいます。

ハチミツは地域の味そのものなので、好きな花を植えればその味になるので、おいしいハチミツが出来上がる楽しい輪を広げる面白さがあります。

蜂を飼う人、花を植える人、ハチミツを使った料理を作る人、そんな人が集まれば、ミツバチを通じた地域の輪が広がり、より深い味の地域になるのではないでしょうか。

地域の輪が広がれば、ミツバチや自然について考える人も増え、次世代の子供たちにこの豊かな平戸の環境を残せるのではないかと考えます。

（３） 私が思い描くまち・地域の姿